
自然保護アピール

Strix 5 : 112-115 (1986)

白山山系におけるイヌワシの抱卵・抱雛行動の妨害例

池田善英^{1,2}

ワシカ類の個体数の減少をもたらす主要因は次の3つである：(1)好適な生息地の減少(2)人間による迫害(3)有毒化学物質による汚染 (Newton 1979 : 263)。(2)の迫害はさらに2つに分けられる：(a)人間の干渉による繁殖行動の妨害，(b)密猟・狩猟である (Newton 1979, 参照)。今日，日本に生息するすべてのワシカ類は，(b)の要因からは保護鳥として法的に守られている。しかし，(a)の要因についての法的な保護は，天然記念物や特殊鳥類に指定されている種類についても，有名無実である。

近年，野鳥保護思想の普及により，ワシカ類が密猟にさらされる危険が減った反面，観察・撮影といった人間の干渉を受ける機会は増大している。ワシカ類の個体群の保護にあたって，重視されるべき問題点の1つは，後者の「人間の干渉による繁殖の妨害」である。しかし，その干渉の多くは，悪意・故意によるものでなく，ワシカ類の繁殖成否に，人間の行動が与える影響の大きさを知らなかったためであると信じる。

筆者は，白山山系におけるイヌワシ *Aquila chrysaetos* の繁殖行動の調査中に，繁殖活動を妨害する要因をいくつか観察した。今回報告するのは，日本イヌワシ研究会ペアコード <5101>における1982-84年の観察例が中心である。観察者が，イヌワシを含めたワシカ類に無用の干渉を与えることを防ぐ上で1つの示唆となることを願い，ここにその概要を報告する。本文に先立ち，野外調査に協力いただいた，金沢大学理学部生態学研究室の田中敏之氏ならびに日本イヌワシ研究会の上馬康生・中川望・山本正恵の各氏に対し，ここに深謝する。

人間の接近による抱卵中断

1982年2月28日 <5101>—15時32分，巢のある岩壁より約300mの地点まで，巢にいるワシより見えないルートを通り接近した。ブッシュを通し顔だけをのぞかせて，10倍の双眼鏡で巢を観察した(ブラインドは用いてない)。観察を始めてほんの数秒で，巢に座っているメスを確認したが，ほぼ同時にメスは立上がり飛び去った。双眼鏡では，巢の中に卵は確認できなかったが，時期的に抱卵中と考えられた。すぐその場を離れ，巢より約1 km離れた地点にテントを張って巢を監視した。巢の中は見えなかったが，メスは16時17分頃に巢のある岩壁に戻ってきた。天候は曇り。

1986年10月20日受理

1. 〒920金沢市丸の内1-1 金沢大学理学部生態学研究室
2. 金沢大学大学院薬学研究科生命科学専攻 (現所属)

3月26日一抱卵中のオスを、巣より約300m離れた地点より、しばらくテントなしで観察したが、気にする様子はなかった。その後、抱卵は4月6日までつづけられ、後に放棄した。回収した卵の殻より、その卵は未受精卵であり、これが放棄の原因と考えられた。しかし、翌年には繁殖に成功している(池田 1985)。

抱卵後期/育雛初期にあたる3月下旬-4月上旬以降には、観察地点の近く(最短距離約250m)を、山菜採りが毎年頻繁に往来したが、親鳥は飛び立たなかった。しかし、育雛中期以降でも、距離約100mに設置したブラインドより、手足の一部を一瞬出すだけでも親鳥は飛び去った。

ヘリコプターの接近による抱卵中断

1983年3月1日<5101>-10時20分、ヘリコプターが巣の真上約400mに接近した時、抱卵中のメスが上空を見上げたのち、巣より飛び去った。巣には卵が1個あった。その後、30分間巣を監視したが、親鳥は巣に戻って来なかった。観察地点を移動したのち、巣にオスが入るのを確認したのは、12時02分だった。天候は晴れ。

3月15日-10時56分、ヘリコプターが巣の上空に接近したが、抱卵中のオスは全く関心を示さず、飛び立たなかった。

4月8日一卵は既にふ化しており、巣には14-15日齢の雛が1羽いた。9時24分と30分にヘリコプターが近くに飛来したが、巣にいたメスは特に反応しなかった。

<5117>では1983-85年の育雛中後期(5-6月)に、工事用の資材運搬のヘリコプターが、巣の近く(約500m)を頻繁に通過したが、親鳥が巣より飛び去ることはなく、この期間は連続して繁殖に成功している(池田 1985)。

ノイヌの吠え声による抱雛中断

1983年4月5日<5101>一巣の対岸上部に300m離れた積雪のかなりある林道上にテント(池田 1984, 参照)を張り、8時24分より巣を観察していた。巣には、ふ化後11-12日齢の雛1羽とメスがいた。9時30分、3頭のノイヌ *Canis familiaris* が林道上を歩いてテントに接近してきた。テントが林道の一部をふさいでいたため、ノイヌは林道を通れず、テントに向かって吠え始めた。9時35分、抱雛中のメスが、テントの方を見上げながら、巣の前縁に座ったまま移動してきた。巣の親鳥の位置からは、テントは上半分が見えているが、林道上のノイヌは見えていないと思われた。その後、ノイヌは断続的に吠え続けた。その度に、親鳥はテントの方を気にしていた。10時00分、親鳥はテントの方を見上げながら立上がり、しばらくテントの方を見つめた後、巣より飛び去った。その後、親鳥は巣の近くには出現せず、巣に戻る様子がなかった。ノイヌが、その後も鳴き止まなかったため、やむなく11時02分にテントを撤収して下山した。天候は晴れ。

考 察

個体差。…<5101>のメスはヘリコプターに素早く反応したが、オスは反応しなかった。ノイヌの場合、オスは近くにいなかったために反応の観察できなかったが、メスは敏感に反応した。観察者の場合も、メスはすぐに反応したが、オスは反応を示さなかった。繁殖行動以外では、オスはしばしば観察者の約100m以内の間近で飛翔したが、メスはあまり近

づかなかった。しかし、〈5117〉のペアの場合、オス・メスともに間近で飛翔することがあった。これらのことから、〈5101〉のメスは特に神経質で警戒心の強い個体であったと考えられる。ハクトウワシ *Haliaeetus leucoryphus* や国外のイヌワシでは、若鳥のほうが成鳥にくらべて人間からの逃避開始距離が短く、迫害を受けやすいことが知られている (Stalmaster 1976, Ellis et al. 1969)。〈5101〉のメスは成熟した個体であったが、オスは亜成鳥であった (池田 1985)。このことも、雌雄の反応の相違の原因かもしれない。

時期。… 〈5101〉では、ヘリコプターによる場合、メスは抱卵初期には飛び立ったが、抱卵後期以降には飛び立たなかった。人間の接近による場合、抱卵期には距離約300mで即座に飛び立ったが、育雛初期以降には飛び立たなかった。しかし、育雛後期でも、距離が100m以内の場合にはすぐに飛び立った。Newton (1979: 140) は、ワシタカ類では人間の妨害に対して、どの種においても繁殖の初期のステージには放棄しやすいが、雛がかえってからには放棄しにくくなるのと述べている。放棄こそしなかったが、これは今回の反応にもあてはまった。このことから、特に初期の繁殖ステージにおいては、人為的な妨害には十分な注意を払う必要がある。

ヘリコプター。… 〈5101〉において、ヘリコプターの接近によりメスが抱卵を一時中断したが、巢の放棄には至らなかった。〈5117〉でも、少なくとも育雛期については影響しなかった。Platt (1977) は、営巣中のシロハヤブサ *Falco rusticolus* に対するヘリコプターの接近の影響をテストした。その結果、親鳥は巢より毎回飛び立った。巢の放棄はなかったが、翌年には巢の場所の変更が多かったと述べている。ハヤブサ *Falco peregrinus* では、繁殖調査にヘリコプターを多用したが、まったく影響はなかったことが報告されている (C.M. White, Newton 1979: 227 に記載)。Ellis (1975) は、ヘリコプターを利用してイヌワシを捕獲した。その際、最接近したヘリコプターには、成鳥でさえ飛べなくする程の威圧効果があると述べている。これらのことから、営巣期とくに抱卵期には、イヌワシの巢の周辺でのヘリコプターの飛行には十分な注意を払う必要がある。

おわりに

今回の、観察した妨害の例はほんの数例でしかなく、イヌワシに悪影響を及ぼさない最低限のライン (たとえば、抱卵期の巢には何m以内に近づいてはいけない) といったものは提示できない。これまで述べてきた例においては、幸い巢の放棄といった最悪の事態には至らなかったが、少なくとも抱卵や抱雛の中断といった繁殖行動の妨害があった。絶滅の危機にあるイヌワシに対して、こういったストレスを与えることは極力避けられねばならない。イヌワシは神経質で人為的妨害に弱い生き物であることを、常に念頭においておくことが、イヌワシとつきあっていくための、最低限のマナーではないだろうか。

文 献

- Ellis, D. H. 1975. First experiments with capturing Golden Eagles by helicopter. Bird-Band. 46: 217-219.
- , Smith, D. G. & Murphy, J. R. 1969. Studies on raptor mortality in western Utha. Great Basin Nat. 29: 165-167.
- 池田善英. 1984. 私のブラインド・アルバム. 日本イヌワシ研究会ニュース(6): 1-2.
- . 1985. 白山山系における巣立ち雛期のイヌワシの研究. 金沢大学大学院理学研究科

修士論文, 金沢. 302pp.

Newton, I. 1979. *Population Ecology of Raptors*. T. & A. D. Poyser, Berkhamsted. 399pp.

* Platt, J. B. 1977. The breeding behavior of wild and captive Gyr Falcons in relation to their environment and human disturbance. Ph.D. dissertation, Cornell University.

* Stalmaster, M. V. 1976. Winter ecology and effects of human activity on Bald Eagles in the Nooksack River valley. Unpublished M.S. thesis, Western Washington College, Bellingham.

*を付したものは直接参照できなかった。

Some Cases of Disturbance in the Incubating
and Brooding Behavior of the Japanese
Golden Eagle in the Hakusan Range

Yoshihide Ikeda¹

In 1982-84, I observed some causes of disturbance of a breeding Golden Eagle *Aquila chrysaetos* pair <5101> (: pair-code of the Society for Research of the Golden Eagle) . Flight of a helicopter 400m above the aerie made an incubating female fly on 1 March 1983. Three dogs barking at the observer in a blind 300m from the nest made a brooding female fly away on 5 April 1983. However, the eagle did not fail to breed. Sensitivity to disturbance may be different in individuals, and in stages of a breeding. I recommended some attention to eagle-watching.

1. Ecological Laboratory, Faculty of Science, Kanazawa University, Marunouchi 1-1, Kanazawa 920, Japan.